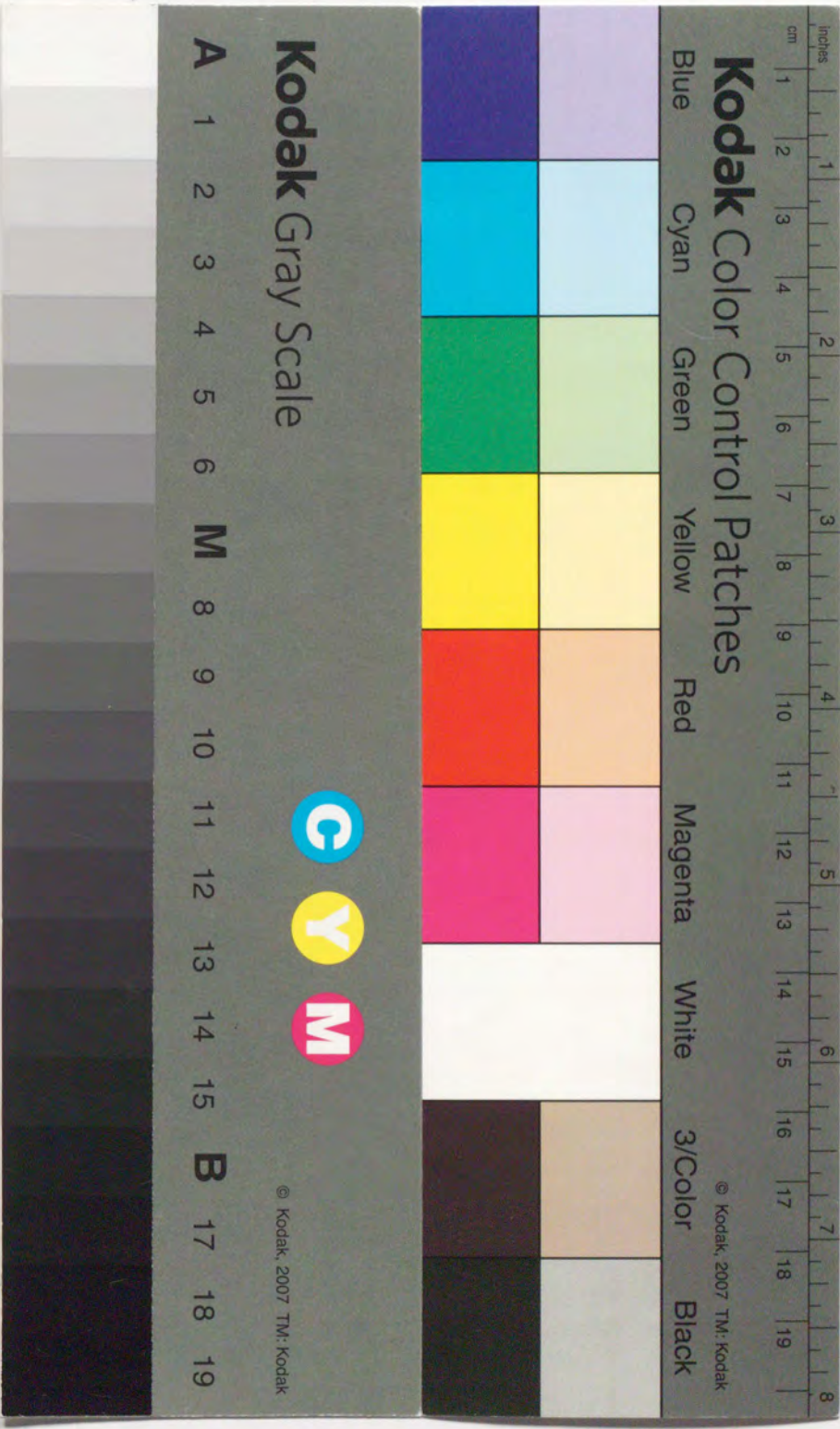




Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

本朝百孝子傳 下



催一軍老る者擲る資忠不向會釈して速き死
 孝行る先父向此木戸を破るがごとく押入りて化し
 歩死を遂るひね最期の場行かろくへ公並く入
 更と来て逆茂木を内より除け木戸を左右に開き
 資忠へ馬を寄家となくも城中へ入りて必死の志を
 うきど城の兵へ孝義を感へ更み資忠をせんとむ右の
 左の除て表向軍をろくろく資忠もろくろく城兵へ
 向きて父が討てし其跡を待つる太刀を口を呀ら
 ぶの倒して貫く血のろくろくを死しうける嗚呼惜ひる
 勇まろくろく父資忠へ毒双の弓取國のため要領の忠臣

まゝ其子資貞忠つゝ稀なる孝女の勇士と家の名を榮
名あり感賞せざんべ有べし人見へ露ひ傾きぬ思ふ
義をわけて命を思ふ時節と共く消身をまじはれ三人が
同時み討死しとて圓けき色もやぬもいえて歎
ぬものへもつける既先づけの兵を極ふ赤坂の城の家
討死するも本陣へ圓けき諸之將も今んとて天王寺を
あまきけり上宮太子の石の鳥居を見りこれ左の柱の
花咲ぬ老木の櫻朽ぬとも
其名へ苔の下に隠れ
と一首の歌を書けて其下の武藏國の住人々見四郎團

阿行軍七十三才正慶三年二月二日赤坂の城へ向て武國を
頼むるも討死はつ畢ねとて又右の柱へ

はてあやうみ思ふ圓の迷ふらん

六の街の道あるせん

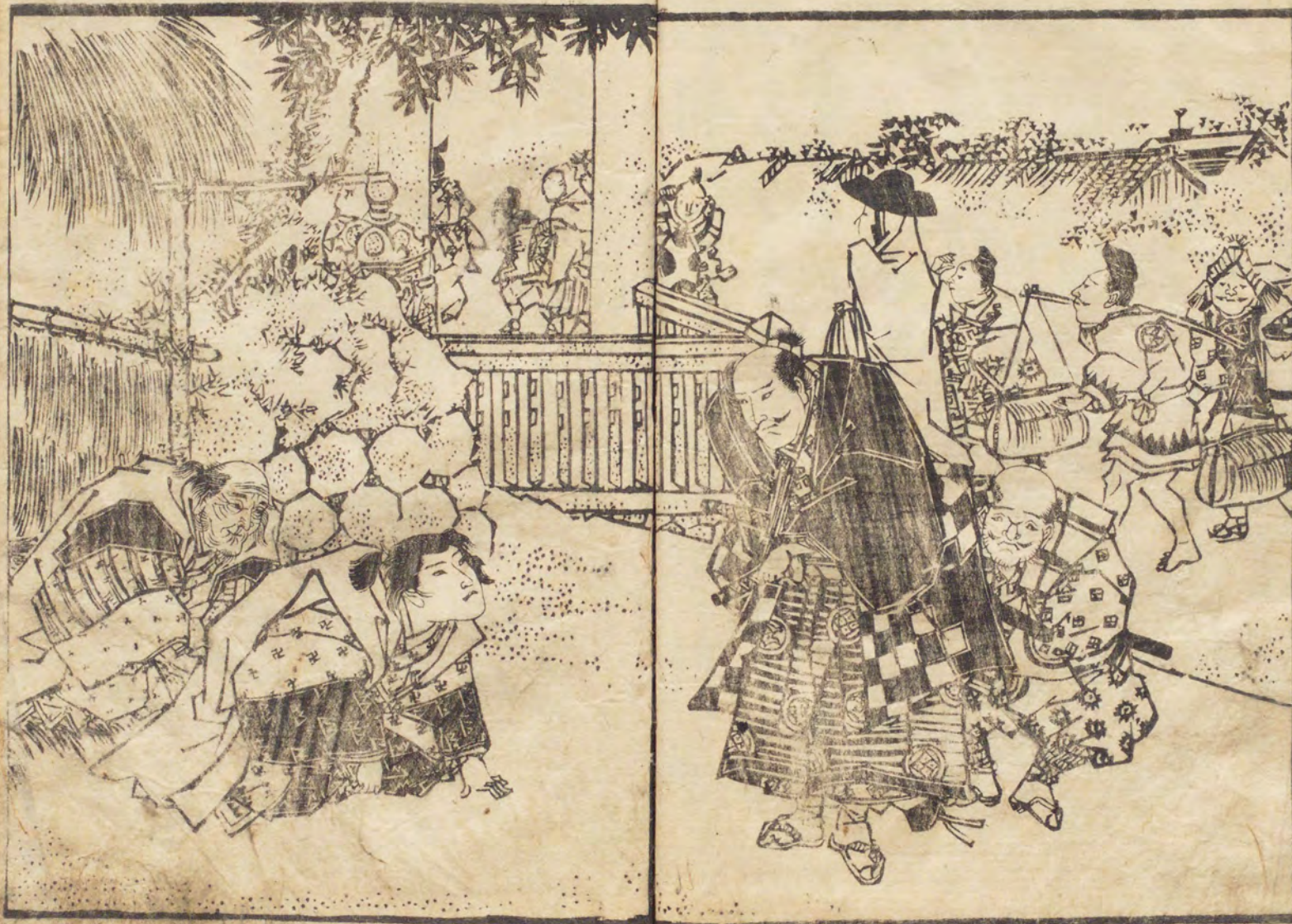
相模國の住人本間九郎資貞の嫡子資忠は年十八歳
正慶三年仲春二日父の死骸を枕し命を止め畢ねとて書り
ける父の國を臣下の通忠孝貞烈の心の程地二首の歌を
いづく有がさるるやさまば骨ハ化して黄壤一堆のふ
朽ぬも名へるまのて青雲九天の上高し新けりあ
其後年久しき春秋まで鳥居の石の消滅する三十一字の

有限の諸國の族人も書うつて忠は孝子の尊き傍を
周く廻り迷へる

或人此淡を冠して曰資忠の死は海かきても進んで
軍令を不遵退ひて父の後を絶え忠孝とも全
くも嗚呼と云ふる此論の人情と云ふる唐山も
資忠の死を聞きて悉く孝子と有り又本朝の君の
小戦死する人多く父の死を女死する其節除んで
別ゆ君の死を直ぐ功名忠賞の子孫あるを頼ま
父の討死の跡を巡りて死する只孝心の存する他
ある余のやむ豈孝子と愛せざるや

奇孝子

ひさし慶長年中のころや安藝の廣島といふ所の備中
屋基七金田屋源六とて同じ年齢の壮人ありて兩人とも
兄弟の如く親しく交りて友と若き者の習俗をとり
宮島といふ所の遊君の迷ひ久し相馴て五里の行程を
厭て早船のまゝて行通ひけるやふ果て金銀を費し
果て家財までもひそかに持ちて賣尽し親類縁者の方
をも誑りて金銀品物などを借あつて遊射の樂に耽る
今親連の老婦もうそを二人に同時の勘當せしもの
をいふ官吏より國中を巡捕し置ければ方々倭國なる



るて六條と其七の心成之ひは六の源六の彼及親を其の父の
如く思ひ之切のたつ養ひ貫の満る錢を坐行車せし
老父を其の世を引か城下の町を引歩の行ゆて湯をむひ
食を其の其身へ先へ食せせ父のなて眠をせするもの
方其の根中と煙草を吸付て吞吞小用金の時へひを引腰を
うへ其底もろろつろ親しきけき付其の人も軒端のふか
き見で自装と膝の心を登一孝の順礼多しと不便せ
如く彼よ是と物をよへらるる一歩の道へ種々の食物を
衣服の裂き六食物の器をんとを車の中射もろろ程積重て
彼古社へ降りける此時甚大酒を酔て四日不食とそち外候

親を袖にぬきて貫のせが実の豆踊ろ一老人をれり
ろく其のひもろるる熱の錢と米を袋に入きて降りろ一其身の
多しと思つて老人を口よりろろ言の居る所へ源六のろろ坐
行車せしと老人を寄せ降りろろの米錢を其のひをろろ
美しきも腹をく俄に己にも車せしとろて貫の錢をひき
と用意せろろ源六の目くは東西南北を袖に一彼をろろ親と
たのろ一老人をぬ抱まろろ衣裏に信実をまて車も実と
名を其の仁政まろろ城下の人情をきくろのろろ親を
けり偽りの文字も分るる人の身のため袖にも親を養ふ
孝ののまねひをまれば有るや世間のく寔と互ひを憐む

さう引ひつる辛苦のやどをがはいけき甚しうを見えて火
暑の病ある瘦まねて餓鬼の体相可笑きと悪口を言ひ
やく邪鬼の振舞最勝はまきと小倉の入口で車より降りて
泳ぐやうに腹を立し顔をしてても其方へ勝る奴より
圓いものもく二人の老人は圓のやれの膏も知ぬ者ども
多を親とやと連歩の巧人己がな付のそ我もうう欺され
たり其上其方へ左も考なりうく見せしめて町の人を欺
ひくもの考なり順れと賞うそと駭くも物をうう取を
不居るまじゆ此方のゆを不考の順れと言ふまじゆの苦ひ
まもるまじゆふりへは當らうく其方の新たもるや又物

ゆべ其方と差違へてもまじゆ奴より町へりて考なり風俗を
まもる考なり小倉へ降りても誰れ見ても考なりまじゆを仕るを
己が考行風俗をまじゆ面見てもまじゆ穢けし此後い物もいね
やふ然に得まじゆとまじゆふ言ふまじゆ泳ぐへうち笑ひまじゆの娘
まじゆ腹まじゆかたねども我言とまじゆを圓くまじゆ常
明ても暮ても只向國元の親が懐くまじゆけまじゆそのまじゆ
今の親を真の親と思へてまじゆを食ひまじゆまじゆ己人の親を殺す
他人まじゆ己が親をまじゆと圓くまじゆ國元の親人へまじゆ公もまじゆまじゆ
まじゆの勤る其方今其の親を大切めまじゆまじゆ他人が
見捨まじゆ此身より人損するて合方も余半費つて國をまじゆ退て

必其兄方のごき四ひの中を今更な絶相尽る公より只
買て香をばま此身が悪く堪忍して呉れ且ま貴ひある
館降かぬに給へぬて番の供めまう公世其十六星を延七
悪まけの降を喰ふ其方の真似をして仍孝行の後の香
此其七の木を木竹をて割うる後ま裏表あるま
け得るに吾親の老老をそのけりて孝行する程の操は
ま其方と向ふまへたまふ人達の多うと餅を寄世目
きもせと食尽し叔源より其方の町の者どもを欺き歩け格
めて又此方をも欺くのみ今酒買て吞せんと言ふ如何に
たふ堪忍せぬと怖ろしき顔と白眼まふ魚源六の腹もま

夫い安きものうと馳せ程く酒肴を調へまりよめ其
十六遠もろく引りて春を直作さふりて小唄を謡う
親父よ星をばまうてと腰をつらと終夜老父を責めて使ひ
けは涙を流し涙を流し涙を流し涙を流し涙を流し涙を流し
何親とてそのふりてと巻ひける心の中を頼母けし

此後其十六まもく邪見の老父を責めけしと苦
痛に絶りねせ小石を退きまうて追うけりて床に其
おふふら脳て苦いものゝとてふのめり涙を
ま二向ふ西人の老人せいのう巻ひ隔るゝのけし
其十六種ひくく腹を四つ止むけり



別後、山崎の如く、我父清と云ふ、其の
小身多し、此の願をよ、(やまの)いふ、ねども、山崎の父、
同達、七、願、行、入、り、の、不、自、由、を、さ、せ、や、す、と、金、順、の、治
ら、し、け、れ、ば、源、六、の、頭、を、地、に、叩、き、た、の、不、好、ひ、速、に、其、意、を、随、ひ
け、し、ば、橋、本、又、は、い、れ、ひ、の、意、を、然、る、に、用、意、を、あ、げ、ま、す、は、物、の、包、を
さ、き、や、し、旅、の、足、着、の、衣、服、大、小、三、重、四、重、採、り、ま、す、ふ、子、へ
ら、し、源、六、の、紙、の、両、腰、横、て、左、も、右、も、重、重、に、ま、す、は、橋、本、の、父、と
駕、籠、の、う、づ、き、源、六、の、親、も、つ、き、駕、籠、を、ま、り、と、思、ふ、身、重、
天、も、登、る、を、看、し、七、花、の、東、へ、紅、雲、の、晴、り、に、け、し、橋、本、氏、ハ、馬
上、の、く、く、の、綱、の、う、づ、き、進、む、向、之、を、ま、せ、ま、る、彼、其、七、ハ、此、の、を

と、や、く、圓、月、街、道、の、多、塞、り、此、其、七、が、大、切、な、る、代、物、車、を、ま、て
引、の、り、ま、し、今、と、つ、き、親、を、誰、が、ゆ、う、と、何、方、へ、連、り、ぞ
ま、し、も、是、派、の、連、り、な、る、今、も、七、卷、の、う、る、難、用、と、小、判、を、
ぞ、勘、定、し、其、外、ふ、う、が、一、生、の、技、持、を、送、る、と、い、う、澄、文、渡、し、
赤、毛、の、ひ、の、け、と、ね、う、の、ま、は、老、人、ハ、駕、籠、の、中、を、ま、り、
如、ら、其、七、己、ハ、宅、早、ま、し、う、う、此、其、我、ハ、備、中、國、王、の、を、
ら、居、る、所、へ、ま、り、て、金、埋、の、親、と、頼、ま、る、い、ふ、ま、は、此、身、も
貧、苦、と、老、老、の、眼、を、ま、り、て、以、前、の、智、恵、の、鏡、も、橙、の、り
其、方、が、ま、の、匹、夫、の、力、を、欺、る、ま、し、う、う、口、惜、し、う、は、ま、し、も、
悔、し、も、何、の、う、う、う、憂、恨、難、七、旬、の、近、き、身、を、以、て、汝、が、土、を、

片へまゝに担ぐ一筋の髪
 思ひぢつてもさうけきと
 まじふ老の腹を固居る
 人々歯を喰ちる左様の
 ゐひひの段々切利
 下胞をぬぬ奴もさぞ
 今宵眠びのち振られ
 宿免ぢくぞ其野多き
 吹つ片々や白眼で行くと
 もつと甚そいふも付合



其候母人まう奈何し
 老人の養ひ料を盡て
 行と駕籠を押へ
 動々ね侍り
 堪へね強欲
 氷道の畜せぬ
 天罰をわたりて
 言ふもやと蹴飛七臨倒
 刀の峯うら膝の血わろ野の
 膝ひ多く抑さばせし小腕まも



